

(19) 日本国特許庁(JP)

(12) 公開特許公報(A)

(11) 特許出願公開番号

特開2009-155657
(P2009-155657A)

(43) 公開日 平成21年7月16日(2009.7.16)

(51) Int.Cl.			F I	テーマコード (参考)		
CO8J	3/075	(2006.01)	CO8J	3/075	CER	4FO70
CO8L	57/00	(2006.01)	CO8L	57/00		4J002
CO8K	5/00	(2006.01)	CO8K	5/00		

審査請求 未請求 請求項の数 7 O L (全 11 頁)

(21) 出願番号	特願2009-97478 (P2009-97478)	(71) 出願人	504145342 国立大学法人九州大学
(22) 出願日	平成21年4月13日 (2009.4.13)		福岡県福岡市東区箱崎六丁目10番1号
(62) 分割の表示	特願2006-247078 (P2006-247078) の分割	(74) 代理人	100080160 弁理士 松尾 憲一郎
原出願日	平成18年9月12日 (2006.9.12)	(72) 発明者	佐田 和己 福岡県福岡市東区箱崎六丁目10番1号 国立大学法人九州大学内
特許法第30条第1項適用申請有り	平成18年3月13日 社団法人 日本化学会発行の「日本化学会第86春季年会(2006)講演予稿集CD-ROM」に発表	(72) 発明者	小野 利和 福岡県福岡市東区箱崎六丁目10番1号 国立大学法人九州大学内
特許法第30条第1項適用申請有り	平成18年9月5日 社団法人 高分子学会発行の「高分子学会予稿集55巻 2号[2006]」に発表	(72) 発明者	新海 征治 福岡県福岡市東区箱崎六丁目10番1号 国立大学法人九州大学内

最終頁に続く

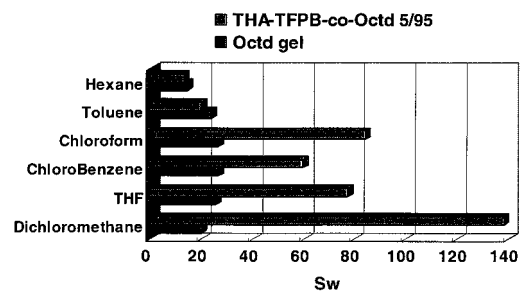
(54) 【発明の名称】 高分子ゲル

(57) 【要約】

【課題】吸油性のゲルにおいてより大きく膨潤するゲルを提供する。

【解決手段】配位性の低いまたは疎水性の高いアニオンをカウンターアニオンとして有する第4級アンモニウム、第4級ホスホニウム、第4級ピリジニウム、第4級イミダゾリニウムのいずれか一種を有する高分子ゲルとする。第4級アンモニウム、第4級ホスホニウム、第4級ピリジニウム、または第4級イミダゾリニウムの長鎖アルキルの長さを長くして、有機溶媒中での膨潤度を大きくする。

【選択図】 図1



【特許請求の範囲】

【請求項 1】

配位性の低いまたは疎水性の高いアニオンをカウンターアニオンとして有する第 4 級アンモニウム、第 4 級ホスホニウム、第 4 級ピリジニウム、第 4 級イミダゾリニウムのいずれか一種、 を有する高分子ゲル。

【請求項 2】

配位性の低いまたは疎水性の高いアニオンを有する第 4 級アンモニウム、第 4 級ホスホニウム、第 4 級ピリジニウム、第 4 級イミダゾリニウムのいずれか一種と、共重合モノマーと、架橋剤と、 からなる高分子ゲル。

【請求項 3】

前記の配位性の低いまたは疎水性の高いアニオンは、臭素アニオン、ヨウ素アニオン、トリフルオロメタン酢酸アニオン、フルオロスルホン酸アニオン、トリフルオロメタンスルホン酸アニオン、ビス(トリフルオロメタンスルホニル)イミドアニオン、テトラフェニルボレートアニオン、テトラキス(4-クロロフェニル)ボレートアニオン、テトラキス(4-フルオロフェニル)ボレートアニオン、パーフルオロテトラフェニルボレートアニオン、テトラフルオロボレートアニオン、過塩素酸アニオン、ヘキサフルオロホスフェートアニオン、ヘキサフルオロアンチモネートアニオン、カルボラン酸アニオンおよびその誘導体アニオンから選ばれる一種であることを特徴とする請求項 1 または請求項 2 に記載の高分子ゲル。

【請求項 4】

前記の第 4 級アンモニウム、第 4 級ホスホニウム、第 4 級ピリジニウム、または第 4 級イミダゾリニウムの長鎖アルキルの長さを長くして、有機溶媒中での膨潤度を大きくしたことを特徴とする請求項 1 ~ 3 のいずれか 1 項に記載の高分子ゲル。

【請求項 5】

前記共重合モノマーの主鎖を長くして、有機溶媒中での膨潤度を大きくしたことを特徴とする請求項 2 に記載の高分子ゲル。

【請求項 6】

前記架橋剤の配分量を小さくして、有機溶媒中での膨潤度を大きくしたことを特徴とする請求項 2 または請求項 5 に記載の高分子ゲル。

【請求項 7】

前記架橋剤の配分量を大きくして、高硬度化したことを特徴とする請求項 2 または請求項 5 に記載の高分子ゲル。

【発明の詳細な説明】

【技術分野】

【0001】

本発明は、高分子ゲルに関するものであり、特に、有機溶媒中で大きな膨潤を示す高分子ゲルに関するものである。

【背景技術】

【0002】

従来、水の保持剤や紙おむつのような吸水剤などとして、自重の数百倍に及ぶ水を吸収して膨潤する高吸水性ゲルが用いられている。

【0003】

このような高吸水性ゲルでは、ゲルを構成する高分子鎖に結合していた塩が水中に溶け出すことにより生じた電荷密度の差に起因する浸透圧を利用して、ゲル内に多量の水を取り込むことにより大きな膨潤を示しているものである。

【0004】

さらに、昨今では、吸水した吸水性ゲルの廃棄処理を容易とするために、例えばカルボキシメチルデンプン(CMS)とデンプンとをブレンドし、水を加えて練り合わせてペースト状態とした後に、電離性放射線を照射して生成した高吸水性デンプンゲルなども知られている(例えば、特許文献 1 参照。)。

10

20

30

40

50

【 0 0 0 5 】

また、吸油性を備えた樹脂で構成した高分子ゲルも提案されており、例えば吸油性樹脂と、基油であるポリブテンと、このポリブテンに相溶するアルキル変性シリコンオイルとで形成した高分子ゲルが提案されており、この高分子ゲルを筆記具用インキ追従体として用いたりしている（例えば、特許文献2参照。）。

【 先行技術文献 】

【 特許文献 】

【 0 0 0 6 】

【 特許文献 1 】 特開 2 0 0 3 - 0 4 8 9 9 7 号 公 報

【 特許文献 2 】 特開 2 0 0 2 - 2 7 4 0 9 4 号 公 報

10

【 発明の概要 】

【 発明が解決しようとする課題 】

【 0 0 0 7 】

しかしながら、従来の吸油性を有したゲルでは、ゲルを構成する高分子鎖の溶媒との相溶性を利用して膨潤を生じさせることにより吸油しているものであり、吸収量が少なく、より大きく膨潤して高吸収性としたゲルが求められていた。

【 0 0 0 8 】

そこで、本発明者らは、吸油性のゲルにおいてより大きく膨潤するゲルを開発すべく研究を行って、本発明を成すに至ったものである。

【 課題を解決するための手段 】

20

【 0 0 0 9 】

本発明の高分子ゲルでは、配位性の低いまたは疎水性の高いアニオンをカウンターアニオンとして有する第4級アンモニウム、第4級ホスホニウム、第4級ピリジニウム、第4級イミダゾリニウムのいずれか一種、 を有する高分子ゲルとした。

【 0 0 1 0 】

また、本発明の高分子ゲルでは、配位性の低いまたは疎水性の高いアニオンを有する第4級アンモニウム、第4級ホスホニウム、第4級ピリジニウム、第4級イミダゾリニウムのいずれか一種と、共重合モノマーと、架橋剤と、 からなる高分子ゲルとした。

【 0 0 1 1 】

さらに、本発明の高分子ゲルでは、以下の点にも特徴を有するものである。すなわち、
 (1) 配位性の低いまたは疎水性の高いアニオンは、臭素アニオン、ヨウ素アニオン、トリフルオロメタン酢酸アニオン、フルオロスルホン酸アニオン、トリフルオロメタンスルホン酸アニオン、ビス(トリフルオロメタンスルホニル)イミドアニオン、テトラフェニルボレートアニオン、テトラキス(4-クロロフェニル)ボレートアニオン、テトラキス(4-フルオロフェニル)ボレートアニオン、パーフルオロテトラフェニルボレートアニオン、テトラキス[3,5-ビス(トリフルオロメチル)-フェニル]ボレートアニオン、テトラフルオロボレートアニオン、過塩素酸アニオン、ヘキサフルオロホスフェートアニオン、ヘキサフルオロアンチモネートアニオン、カルボラン酸アニオンおよびその誘導体アニオンから選ばれる一種であること。

30

(2) 第4級アンモニウム、第4級ホスホニウム、第4級ピリジニウム、または第4級イミダゾリニウムの長鎖アルキルの長さを長くして、有機溶媒中での膨潤度を大きくしたこと。

40

(3) 共重合モノマーの主鎖を長くして、有機溶媒中での膨潤度を大きくしたこと。

(4) 架橋剤の配分量を小さくして、有機溶媒中での膨潤度を大きくしたこと。

(5) 架橋剤の配分量を大きくして、高硬度化したこと。

【 発明の効果 】

【 0 0 1 2 】

請求項1記載の発明によれば、配位性の低いまたは疎水性の高いアニオンをカウンターアニオンとして有する第4級アンモニウム、第4級ホスホニウム、第4級ピリジニウム、第4級イミダゾリニウムのいずれか一種、 を有する高分子ゲルとしたことによって、有機

50

溶媒に対して高い吸収性を示して大きく膨潤する高分子ゲルを提供できる。

【 0 0 1 3 】

請求項 2 記載の発明によれば、配位性の低いまたは疎水性の高いアニオンを有する第 4 級アンモニウム、第 4 級ホスホニウム、第 4 級ピリジニウム、第 4 級イミダゾリニウムのいずれか一種と、共重合モノマーと、架橋剤と、 からなる高分子ゲルとしたことによって、有機溶媒に対して高い吸収性を示して大きく膨潤する高分子ゲルを提供できる。

【 0 0 1 4 】

請求項 3 記載の発明によれば、請求項 1 または請求項 2 に記載の高分子ゲルにおいて、配位性の低いまたは疎水性の高いアニオンを、臭素アニオン、ヨウ素アニオン、トリフルオロメタン酢酸アニオン、フルオロスルホン酸アニオン、トリフルオロメタンスルホン酸アニオン、ビス(トリフルオロメタンスルホニル)イミドアニオン、テトラフェニルボレートアニオン、テトラキス(4-クロロフェニル)ボレートアニオン、テトラキス(4-フルオロフェニル)ボレートアニオン、パーフルオロテトラフェニルボレートアニオン、テトラキス[3,5-ビス(トリフルオロメチル)-フェニル]ボレートアニオン、テトラフルオロボレートアニオン、過塩素酸アニオン、ヘキサフルオロホスフェートアニオン、ヘキサフルオロアンチモネートアニオン、カルボラン酸アニオンおよびその誘導体アニオンから選ばれる一種とすることによって、有機溶媒に対して高い吸収性を示して大きく膨潤する比較的安価な高分子ゲルを提供できる。

10

【 0 0 1 5 】

請求項 4 記載の発明によれば、請求項 1 ~ 3 のいずれか 1 項に記載の高分子ゲルにおいて、第 4 級アンモニウム、第 4 級ホスホニウム、第 4 級ピリジニウム、または第 4 級イミダゾリニウムの長鎖アルキルの長さを長くしたことによって、有機溶媒中での膨潤度を大きくして有機溶媒に対してより高い吸収性を示す高分子ゲルを提供できる。

20

【 0 0 1 6 】

請求項 5 記載の発明によれば、請求項 2 記載の高分子ゲルにおいて、共重合モノマーの主鎖を長くしたことによって、有機溶媒中での膨潤度を大きくして有機溶媒に対してさらに高い吸収性を示す高分子ゲルを提供できる。

【 0 0 1 7 】

請求項 6 記載の発明によれば、請求項 2 または請求項 5 に記載の高分子ゲルにおいて、架橋剤の配分量を小さくして有機溶媒中での膨潤度を大きくしたことによって、有機溶媒に対してさらに高い吸収性を示す高分子ゲルを提供できる。

30

【 0 0 1 8 】

請求項 7 記載の発明によれば、請求項 2 または請求項 5 に記載の高分子ゲルにおいて、架橋剤の配分量を大きくして高硬度化したことによって、有機溶媒中での膨潤度は若干低下するが、所定形状の高分子ゲルを提供できる。

【 図面の簡単な説明 】

【 0 0 1 9 】

【 図 1 】 各種溶媒に対する Octd gel と THA-TFPB-co-Octd 5/95 gel の膨潤度の評価結果を示すグラフである。

【 図 2 】 各種溶媒に対する EH gel と THA-TFPB-co-EH 5/95 gel の膨潤度の評価結果を示すグラフである。

40

【 発明を実施するための形態 】

【 0 0 2 0 】

本発明の高分子ゲルは、配位性の低いまたは疎水性の高いアニオンをカウンターアニオンとして有する第 4 級アンモニウム、第 4 級ホスホニウム、第 4 級ピリジニウム、第 4 級イミダゾリニウムのいずれか一種を有する高分子ゲルである。ここで、「疎水性の高い」とは、「親油性の高い」または「親水性の低い」と同義である。

【 0 0 2 1 】

すなわち、高分子ゲルにおける吸油性を、ゲルを構成する高分子鎖の溶媒との相溶性に基づくものとするのではなく、ゲルを構成する高分子鎖に結合していた塩を油などの有機

50

溶媒中に溶け出させることにより電荷密度の差を生じさせて、この電荷密度の差に起因する浸透圧を利用してゲル内に多量の有機溶媒を取り込むことによって大きな膨潤を可能としているものである。

【0022】

つまり、カウンターアニオンとして配位性の低いまたは疎水性の高いアニオンを備えていることにより、有機溶媒中において配位性の低いまたは疎水性の高いアニオンを容易に遊離させることができ、このアニオンの遊離によって生じた電荷密度の差に起因する浸透圧を利用してゲル内に多量の有機溶媒を取り込んでいるものである。

【0023】

このように、アニオンの遊離によって生じた電荷密度の差に起因する浸透圧を利用することにより、従来のようにゲルを構成する高分子鎖の有機溶媒との相溶性を利用して生じていた膨潤が最大で自重の30倍程度までであったのに対し、80~130倍程度にまで向上させることができる。

10

【0024】

特に、配位性の低いまたは疎水性の高いアニオンを、臭素アニオン、ヨウ素アニオン、トリフルオロメタン酢酸アニオン、フルオロスルホン酸アニオン、トリフルオロメタンスルホン酸アニオン、ビス(トリフルオロメタンスルホニル)イミドアニオン、テトラフェニルボレートアニオン、テトラキス(4-クロロフェニル)ボレートアニオン、テトラキス(4-フルオロフェニル)ボレートアニオン、パーフルオロテトラフェニルボレートアニオン、テトラフルオ

20

【0025】

また、第4級アンモニウム、第4級ホスホニウム、第4級ピリジニウム、または第4級イミダゾリニウムではそれぞれ長鎖アルキルを備えており、この長鎖アルキルの長さをできるだけ長くすることにより親油性を向上させることができ、有機溶媒中での膨潤度を大きくして有機溶媒に対してより高い吸収性を示す高分子ゲルとすることができる。このよ

30

【0026】

一方、長鎖アルキルを短くした場合には、親水性を向上させることができるので、水やアルコールなどに対する膨潤度を向上させることができる。

【0027】

本発明の高分子ゲルは、特に、配位性の低いまたは疎水性の高いアニオンを有する第4級アンモニウム、第4級ホスホニウム、第4級ピリジニウム、第4級イミダゾリニウムのいずれか一種と、共重合モノマーと、架橋剤とで構成しており、前記の長鎖アルキルの長さ調整によって親油性と親水性を調整するだけでなく、共重合モノマーの長さ調整によっ

40

【0028】

すなわち、共重合モノマーの主鎖を長くした場合には親油性を向上させることができるので、有機溶媒などの極性の低い溶媒に対する膨潤度を向上させることができる。親油性を向上させるためには、共重合モノマーの主鎖はC6以上の長さを有していることが望ましい。

【0029】

一方、共重合モノマーの主鎖を短くした場合には親油性を向上させることができるので、水やアルコールなどの極性の高い溶媒に対する膨潤度を向上させることができる。

【0030】

50

ここで、共重合モノマーとしては、塩化ビニル、アクリル酸誘導体、メタクリル酸誘導体、アクリロニトリル、メタクリロニトリル、スチレン誘導体、ブタジエン、エチレン、プロピレン、イソプレン、ビニルピリジン誘導体などを用いることができる。

【0031】

さらに、架橋剤の配分量を調整することにより高分子ゲルの硬さを調整することができ、架橋剤の配分量を小さくした場合には、高分子ゲルの変形性が高い軟らかい状態とすることができ、有機溶媒の吸収による変形を容易とすることができるので、有機溶媒中での膨潤度が大きく、有機溶媒に対して高い吸収性を示す高分子ゲルとすることができる。

【0032】

一方、架橋剤の配分量を大きくした場合には、高分子ゲルの変形性が小さい硬い状態となるので、有機溶媒の吸収による変形に対する抵抗が大きくなりやすく、有機溶媒中での膨潤が阻害されることとなる。したがって、架橋剤の配分量の調整によって高分子ゲルによる有機溶媒の吸収量を容易に調整できる。

10

【実施例1】

【0033】

本実施例では、長鎖アルキルを有する第4級アンモニウムカチオンと、カウンターアニオンとして配位性の低いまたは疎水性の高いアニオンであるテトラキス[3,5-ビス(トリフルオロメチル)-フェニル]ボレートアニオン(Tetrakis[3,5-bis(trifluoromethyl)-phenyl]borate (TFPB))を用い、疎水性イオン対THA-TFPBを導入した高分子電解質ゲルを作成した。第4級アンモニウムの代わりに、第4級ホスホニウム、第4級ピリジニウム、または第4級イミダゾリニウムを用いてもよい。

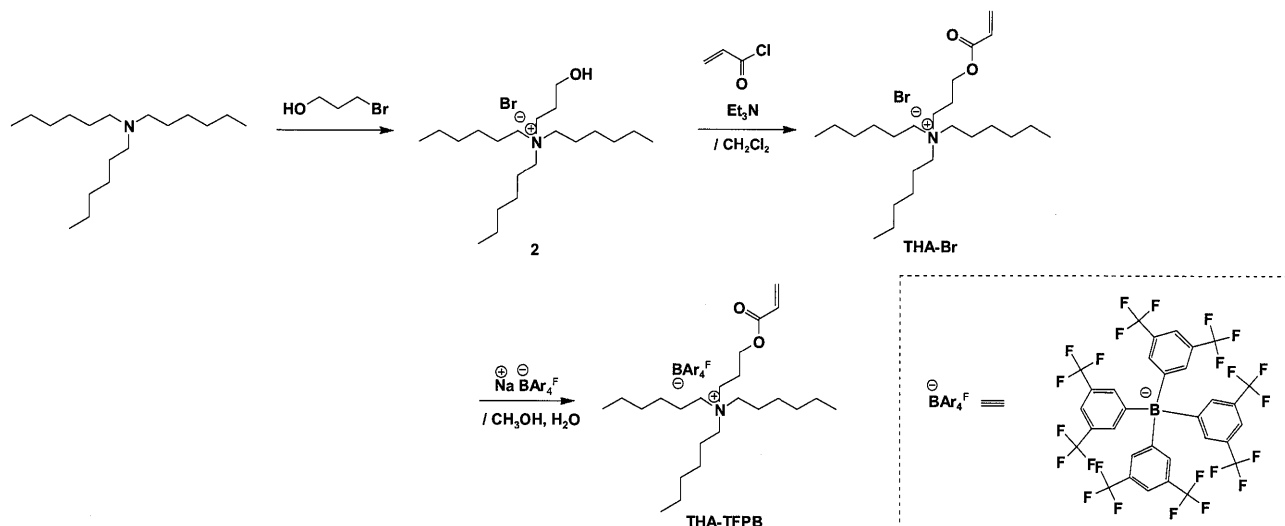
20

【0034】

疎水性イオン対THA-TFPBは、以下の化学式に基づいて作成した。

【0035】

【化1】



30

40

すなわち、三角フラスコにTetrakis[3,5-bis(1)-phenyl]borate, sodium salt dehydrate(1.47g, 1.66mmol)を入れてメタノール-水混合溶媒に溶解させ、この溶液にTHA-Br(0.74g, 1.60mmol)のメタノール-水混合溶媒を加えて室温にて攪拌した。12時間後に沈殿を別し、メタノール-水混合溶媒で固液洗浄して減圧乾燥して生成した。収量は1.36g(収率68%)であった。¹H-NMRによる同定結果を下表に示す。

【0036】

【表 1】

¹H-NMR (600 MHz, CDCl₃, TMS 基準, r.t.)

δ (ppm)	分裂(J/Hz)	積分値	理論値	帰属
0.85	t(6.7)	9.00	9H	l
1.27	m	18.9	18H	i,j,k
1.56	m	7.04	6H	h
1.98	m	2.04	2H	d
3.02	t(8.5)	6.05	6H	g
3.18	t(8.4)	2.04	2H	e
4.21	t(5.5)	2.01	2H	f
5.87	d(10.4)	1.00	1H	b
6.13	dd(10.4,17.2)	0.99	1H	c
6.44	d(17.3)	1.00	1H	a
7.53	s	4.03	4H	m
7.70	s	8.04	8H	n

10

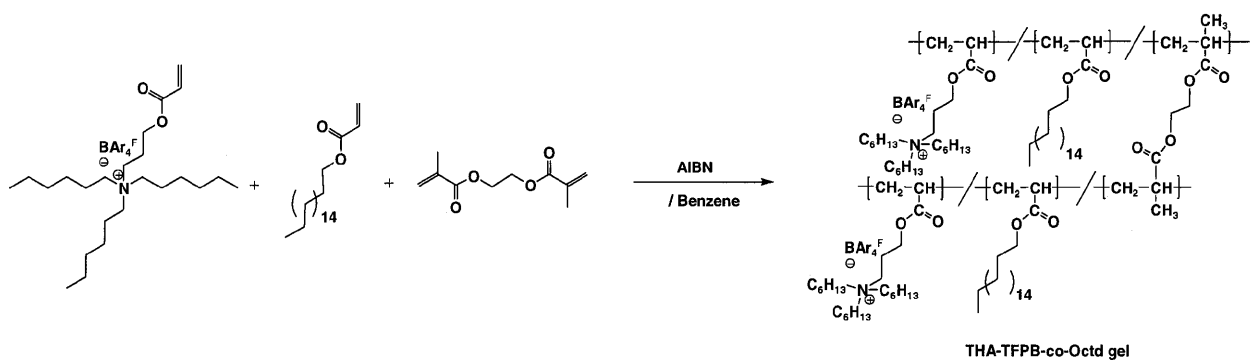
20

第 1 のサンプルとして、疎水性イオン対THA-TFPBと、中性モノマーであるオクタデシルアクリレート(Octd)との架橋共重合体(THA-TFPB-co-Octd gel)を生成した。すなわち、THA-TFPB-co-Octd gelは、以下の化学式に基づいて作成した。

【 0 0 3 7 】

30

【化 2】

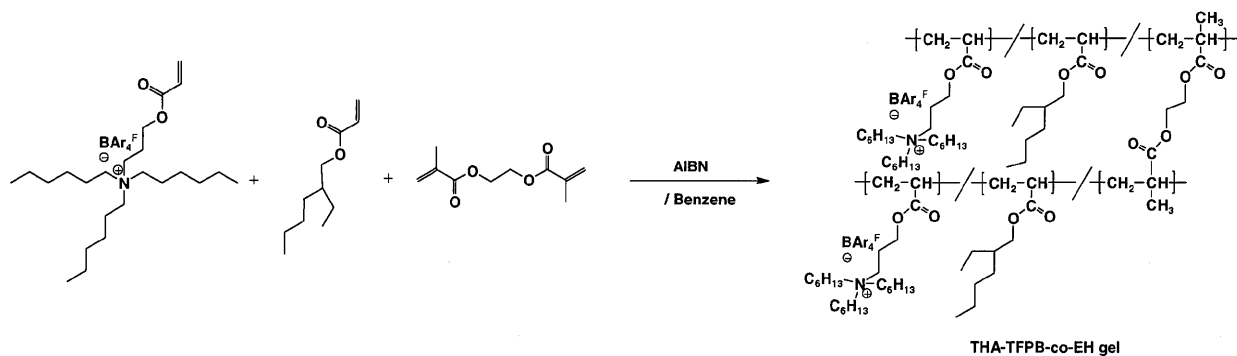


40

また、第 2 のサンプルとして、疎水性イオン対THA-TFPBと、2 エチルヘキシルアクリレート(EH)との架橋共重合体(THA-TFPB-co-EH gel)を生成した。すなわち、THA-TFPB-co-EH gelは、以下の化学式に基づいて作成した。

【 0 0 3 8 】

【化 3】



10

特に、第 1 のサンプル及び第 2 のサンプルでは、それぞれ下表に示す条件で、疎水性イオン対THA-TFPBの有無のサンプルを作成した。すなわち、第 1 のサンプルで疎水性イオン対THA-TFPBを含有しないOctd gelと、中性モノマー（Octd）に対して仕込み比で疎水性イオン対THA-TFPBを 5 % 導入したTHA-TFPB-co-Octd 5/95 gelと、第 2 のサンプルで疎水性イオン対THA-TFPBを含有しないEH gelと、中性モノマー（EH）に対して仕込み比で疎水性イオン対THA-TFPBを 5 % 導入したTHA-TFPB-co-EH 5/95 gelとを作成した。

【 0 0 3 9】

【表 2】

Gel compositions	THA-TFPB (mol / L)	monomer (mol / L)	EGDMA (mol / L)	AIBN (mol / L)
THA-TFPB-co-Octd 5/95 gel	0.1	1.9	0.020	0.040
Octd gel	0.0	2.0	0.020	0.040
THA-TFPB-co-EH 5/95 gel	0.1	1.9	0.020	0.040
EH gel	0.0	2.0	0.020	0.040

20

Solvent; Benzene

上記のサンプル作成では、表 2 に示した条件でそれぞれ調整したサンプルをアンプル管に入れて脱気封管し、60 で 24 時間加熱し、ゲル化させた。ゲル化後、アンプル管を割ることにより均一な円柱状のゲルを得て、バキュームオープンにて乾燥し、直径 4 mm、厚み約 1 mm の円盤状に切断した。

30

【 0 0 4 0】

このように円盤状とした乾燥ゲルの重量を計測し、この乾燥ゲルに過剰の溶媒を加えて平衡状態に達するまで放置し、溶媒を吸収して膨潤した膨潤ゲルの重量を計測した。ここで、乾燥ゲルの重量を W_{dry} 、膨潤ゲルの重量を W_{wet} とし、膨潤ゲルの重量と乾燥ゲルの重量との差である $(W_{wet} - W_{dry})$ を乾燥ゲルが吸収した溶媒量として算出した。

【 0 0 4 1】

さらに、膨潤度 Sw を次式により定義した。

【 0 0 4 2】

$$Sw = (W_{wet} - W_{dry}) / W_{dry}$$

溶媒を、ヘキサン(Hexane)、トルエン(Toluene)、クロロホルム(Chloroform)、クロロベンゼン(ChloroBenzene)、テトラヒドロフラン(THF)、ジクロロメタン(Dichloromethane)とした場合の、Octd gelとTHA-TFPB-co-Octd 5/95 gelの膨潤度の評価結果を図 1 のグラフに示す。

40

【 0 0 4 3】

疎水性イオン対THA-TFPBを含有しないOctd gelでは、膨潤度が 20 倍程度であるのに対して、疎水性イオン対THA-TFPBを含有したTHA-TFPB-co-Octd 5/95 gelでは、約 60 倍以上の高い膨潤度を示すことがわかる。なお、THA-TFPB-co-Octd 5/95 gelでもヘキサン及びトルエンでは膨潤度の向上が見られなかったが、これは、ヘキサン及びトルエンでは疎

50

水性イオン対THA-TFPBの解離があまり起こらず、電荷密度の差が生じないことによって、電荷密度の差に起因する浸透圧が発生しなかったためだと考えられる。

【0044】

図1に示すように、架橋剤として用いたエチレングリコールジメタクリレート(EGDMA)の配合量が約1%の場合、THA-TFPB-co-Octd 5/95 gelは、クロロホルムにおける膨潤度は8.4倍、テトラヒドロフランにおける膨潤度は7.7倍、ジクロロメタンにおける膨潤度は13.7倍であるが、架橋剤の配合量が約0.5%とした場合には、クロロホルムにおける膨潤度は14.4倍、テトラヒドロフランにおける膨潤度は16.3倍、ジクロロメタンにおける膨潤度は18.8倍で、さらに、架橋剤の配合量が約0.2%とした場合には、クロロホルムにおける膨潤度は29.7倍、テトラヒドロフランにおける膨潤度は38.4倍、ジクロロメタンにおける膨潤度は48.2倍であった。

10

【0045】

すなわち、THA-TFPB-co-Octd 5/95 gelでは、架橋密度を減少させることにより、膨潤度を向上させることができることがわかる。

【0046】

溶媒を、トルエン(Toluene)、テトラヒドロフラン(THF)、ジクロロメタン(Dichloromethane)、アセトン(Acetone)、n-ブチロニトリル(n-Butyronitrile)とした場合の、EH gelと、THA-TFPB-co-EH 5/95 gelの膨潤度の評価結果を図2のグラフに示す。

【0047】

疎水性イオン対THA-TFPBを含有しないEH gelでは、膨潤度が1.0倍以下であるのに対して、疎水性イオン対THA-TFPBを含有したTHA-TFPB-co-EH 5/95 gelでは、約4.5倍以上の高い膨潤度を示すことがわかる。なお、THA-TFPB-co-EH 5/95 gelでもトルエンでは膨潤度の向上が見られなかったが、これは、トルエンでは疎水性イオン対THA-TFPBの解離があまり起こらず、電荷密度の差が生じないことによって、電荷密度の差に起因する浸透圧が発生しなかったためだと考えられる。

20

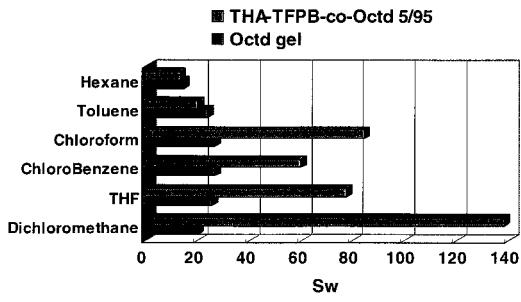
【産業上の利用可能性】

【0048】

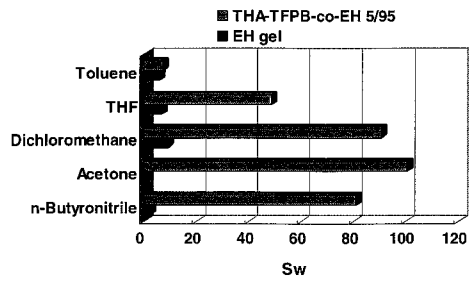
本発明の高分子ゲルは、有機溶媒に対して大きい膨潤を示すため、高性能なオイルフェンスとして利用できるだけでなく、食用油の廃棄に用いるための吸着剤あるいは固化剤として利用でき、さらには有機溶媒を固化して貯蔵する固化剤として利用することもできる。

30

【 図 1 】



【 図 2 】



フロントページの続き

特許法第30条第1項適用申請有り 平成18年5月10日 社団法人 高分子学会発行の「高分子学会予稿集
55巻 1号[2006]」に発表

Fターム(参考) 4F070 AA32 AC33 AC42 AC45 AC55 AE30 CA03 CB12
4J002 AC031 AC061 BB031 BB121 BC041 BD051 BG041 BG051 BG091 BJ001
EB007 EB047 EB067 EN006 EU046 EU116 EW176 GD02 GD04 GT00